

日本におけるいじめに関する研究

張 子静 (チョウ・シセイ)

導入

● 「いじめ」を選ぶ理由

いじめというのは、人間社会には必ず存在している。私はそう考えている。日本だけではなく、世界中のどこでも起こっているのだろう。しかし、日本に留学している間、ニュースで、ほぼ毎日いじめの報道をしている。しかも、ただの子供たちのイタズラだけではなく、深刻ないじめで自殺してしまう件も少なくない。それほどのいじめ事件が毎日繰り返されていることに、正直ものすごく驚いた。いじめはどこでも存在しているのは確かなことだと思うが、日本のいじめ問題は普通でないほどひどいのではないのだろうか。他の国については調べていないが、香港ではそんなに深刻ないじめはめったにない。いじめで自殺するというニュースも全く耳にした事がない。日本のいじめ問題はなぜそんなに深刻なのか、なぜなかなか解決できないのか、その原因を知りたい。そこで、今回は日本におけるいじめ問題をテーマとして研究した。

● 研究方法

日本におけるいじめについて、統計資料から実態を把握し、先行研究をもとにいじめの原因・克服のあり方、また報道の問題について分析する。

1. 「いじめ」の定義と判断

いじめの定義、辞書によると、「肉体的、精神的に自分より弱いものを、暴力やいやがらせなどによって苦しめること」¹と書いてある。もちろん、辞書の意味通りに誰から見ても明らかにいじめにつながる行為だと判断できるいじめがある。が、実はいじめは「見えにくい」といわれている。つまり、判断しにくいということである。なぜかという、いじめがあったかどうかを決定するのが、いじめる側の動機や、外から観察していじめ行為が事実としてあったかどうかによって決めるというよりは、むしろいじめられる側の被害感情による。いわば被害者の主観的世界を基礎とする現象なのである²。そのため、被害側がいじめられたという感情を持っているならば、「いじめ」となり、持っていなければ、ただの「遊び」や「ふざけ」となる。また、被害者自身からいじめられている苦しい気持ちを表さない限り、まわりの人はいじめを判断しにくいのだ。

¹ 大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉) / 監修: 松村明

² いじめ: 教室の病い / 森田洋司, 清永賢二著, 東京 金子書房 1994. 7, P.21

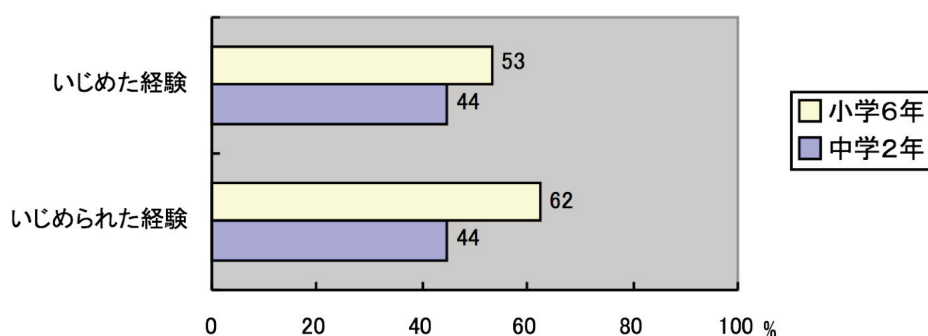
いじめが判断しにくいもう一つの原因は、被害者の感情とまわりの人による事態の認識の間にずれの存在にある」。その「ずれ」はどのようなものか、例を挙げてみよう。例えば、ドッジボールのなかでいじめられっ子に中心してボールを投げつける。「ポロレスごっこ」と称して相手をいためつける。わざと足を出して相手を転倒させておいて、頭をかきながら「ごめん」といってあやまる手口など³。それは明らかに悪質ないじめ行為だが、加害者の側が巧みにいじめの動機を隠したり、正当化したりする。そうすると、まわりの方は、こういう行為はただの「遊び」や「ケンカ」に過ぎないとみる。これが、被害者とまわりの人によるいじめの認知のずれである。このような「ずれ」があるからこそ、いじめはしっかりと観察し、両者の気持ちを聞き、判断する必要があると考える。

したがって、いじめであると判断するには、被害者側の被害感情はもちろん、外から判断するためには、加害者側の動機を組み込む必要がある。

2. なぜ、いじめるのか

日本のいじめ問題の深刻さはテレビをつけると、なんとなく分かってくる。ほぼ毎日繰り返すいじめに関するニュース。いじめでの自殺と殺人事件も少なくない。そして、調査によると、今の子供がいじめに会う比率は、思った以上に高いようだ。この経験の比率とは、調査対象は今までにいじめたり、いじめられたりなんらかのかたちでいじめに関わってきた者の比率を意味している。調査によると、小学六年生での経験率は77%であり、中学二年生では62%を占めている⁴。そして、いじめた経験といじめられた経験についての調査もある（図①参照）。

図①—いじめ経験率



注：『いじめ：教室の病い』／森田洋司、清永賢二著、東京 金子書房 1994.7、39頁を参考に筆者作成。

³ 同上、P.22

⁴ 同上、P.39

図①によれば、いじめた経験者は小学六年生で53%、中学二年生では44%である。また、いじめられた経験をもつものは小学六年生で62%、中学二年生で44%を占めている。以上のデータを見ると、今日の日本の子供たち、いじめへの接触率はかなり高い。いじめは学校生活のひとつだと言っても過言ではないのだろう。

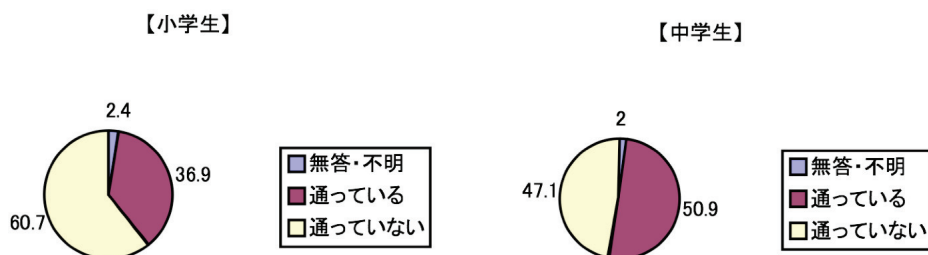
しかし、なぜ日本の学校でそんなにいじめ起きやすいのか。やはり日本の教育、社会、家庭の状況と深く関係があるのではないだろう。まず、日本の教育から分析したいと思う。

(1) 受験と学歴社会

近代社会は昔のような血縁による世代間継承はなくなったが、代わりに学歴社会になった。つまり、学歴によって社会的地位や評価が定まる社会である。これは表面から見ると、確かにいいことかもしれないのだが、一方、無意識に子供たちに重いストレスをかける状況を生み出している。そして、そのストレスを解消するためにいじめが発生するのではなかろうか。

学歴社会といえ、学歴によって人の価値がはかれる社会である。学歴を重視する結果、受験中心の教育社会が生まれた。進学競争や偏差値向上は子供の日課になってしまうのが今の状況である。親と学校からの強く期待に応えて、受験でいい点を取るために、ほとんどの日本の子供は塾を通っているようだ。文部科学省の調査によれば、この現状は明らかである。学習塾へは小学生の37%、中学生の51%が通っている(図②参照)⁵。

図②—学校段階別通塾の状況



子供としては、もちろんもっと遊びたいであろう。しかし、学歴至上の社会に対して、それは無理に近いのだろう。結果として、ほとんどの子供はこの「学歴至上」の価値観を認め、親と学校の期待に応えていい子ぶっている。しかし、本音はもちろんそうではない。こんな状態で子供たちは不満やストレスを溜まりやすいのではないだろう。いい子を演じ続けるせいで溜まってしまったストレスを解消するために、子供がいじめなどの反社会的な行動をするのも珍しくなろう。親と教師を「見えないところ」で弱い子をいじめて、普段の束縛された生活から解放できるのだろう。もっと遊びたい、自由でありたい子供た

⁵ 『義務教育に関する意識調査』結果の速報(概要) 文部科学省(2005年6月)

ちにとって、「いじめ」はただの「遊び」あるいは「うさばらし」のひとつかもしれない。

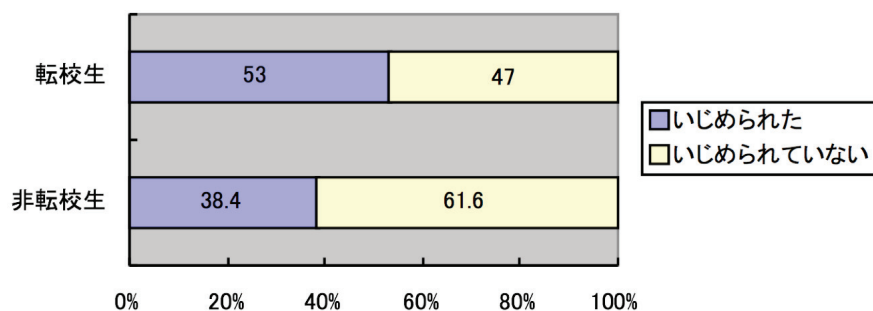
(2) 独特な社会文化

● 集団主義

資料によると、日本人の特徴は、集団行動が好きであり、仲間との同一行動をとりやすいといわれる。日本人の個の確立の乏しさは、従来から、指摘されていることである⁶。つまり、日本人は個人的に目立つことはあまり好きでない。できる限り、まわりの人と同じことをして群れる。一緒に群れることができない者は、異端者として無視・敵視されるのである。また、その群れられない子を「ネクラ」、「グズ」、「ドジ」⁷として蔑視することもあるそうだ。このような社会文化を受け、親は子供たちに学校で必ず目立つ行動をするのを戒める。その結果、未成熟の子供たちはまわりの人と同調できない、群れることができない者が「悪い存在」として認識してしまう。自分も異端者とならないために配慮する一方、まわりの「平凡でない」異端者を攻撃し、排斥することになるのだろう。つまり、いじめが発生するのである。

異端者としてみなされやすいタイプは、いつも性格が極端的に内気、無口などの子だが、転校生も異端者としてみなされやすいタイプのひとつのだ。なぜかというと、転校生は集団への新規参入者だからだ。つまり、まわりと違う存在なのである。周囲と違うものは異端者に見える社会文化により、転校生はいじめされる確率は普通の生徒より高いのだろう。また、集団主義によると、人々は必ず自分の位置や役割がある。転校生は新規参入者として、迎える集団はこの新規参入者が集団の中にどのように位置をつけるか試したいため、さまざまな企てを仕掛けてくる傾向もあるそうだ。このような傾向は調査によると明らかにわかる (図③参照)。

図③—転校といじめ



注:『いじめ:教室の病い』/森田洋司, 清永賢二著、東京 金子書房 1994.7、70頁を参考に筆者作成。

図③に見るように、転校経験のある子では53%の子がいじめられた経験をもっている。

⁶ いじめ:見えない子供の世界/箭内仁(ほか)共著、P.42

⁷ 同上、P.43

転校経験のない子では、いじめられた経験をもつ子が38.4%であり、両群は結構差が見られる。この調査結果を見ると、転校生がいじめられる傾向があるようだ。これは、日本の集団主義の産物ではないのだろうかと考えている。

● 縦社会

縦社会は人間関係において、役職・階級など上下の序列が重視される社会である⁸。つまり、下の弱者は、常に上の強者に管理されることになってきていることである。この状態はちょうどいじめと同じではないのか。いじめは、強者による弱者への攻撃的支配行動の面をもつ⁹。現在の日本社会はこういう縦社会の概念はまだ健在している。ある意味で、社会自体がいじめの構造となっているのではないだろうか。先輩からの「しごき」という名のいじめは昔から今までずっと存在しているし、上の人からのいじめのせいで、自殺してしまう子もあるそうだ。

2005年12月6日

長野県立丸子実業高校の1年生の男子生徒（16）自宅で首吊り自殺

朝、長野県の県立丸子実業高校1年・T君（16歳）が、御代田町の自宅で首を吊って死んでいるのを母親が見つけた。自室には「いじめについて何も解決していません」「学校の先生にもっと早く謝ってほしかった」などと書かれた手紙やノートがあった。

T君の所属するバレー部では、7月に先輩が1年の生徒を正座させ、ハンガーで殴るということがあった。またT君は大きな声が出せない体質だったが、先輩に声の真似をされて馬鹿にされるということもあったという。¹⁰

こういう弱肉強食の社会体制で育っていた子供たちが弱者であるといじめられるだろうという意識を無意識に持っているかもしれない。これも、いじめを発生しやすい原因の一つのではないかと考えている。

（3）家庭構造の変化

日本は少子化、核家族化が著しく進行している。昔と違って、家族の人数がだんだん少なくなった。子供たちは少人数の家族の中で、対人関係を学びチャンスも少なくなる。そして、親は中流を維持するために、仕事ばかりで、子供に顧みることさえもできなくなって、子供の教育が全部学校に依存しようとしているのも現在の日本家庭の現状だ。こういう子育て意識の低下のせいで、子供たちは家族とのふれあいが少なく、人間関係もうまくコントロールできなくなるのではなかろう。そして、学校で同じ状況を共有している子供

⁸ 大辞泉 増補・新装版（デジタル大辞泉）／監修：松村明

⁹ いじめ：見えない子供の世界／箭内仁（ほか）共著、P.35

¹⁰ いじめ自殺／<http://yabusaka.moo.jp/ijime-jisatu.htm>

たちはグループになって、家族への不満や苛立ち、ストレス解消として他の弱い子をいじめることとなる。しかし、やはりこういう家庭で育ってきた子供たちに対して、いじめることはただのゲームにすぎないかもしれない。なぜかという、兄弟関係の貧困の核家庭で育ってきて、喧嘩なども経験したことがない子供たちが、もちろん意地悪される苦しみや痛みも知らないはずなのだ。そして、少子化で家族からの溺愛すぎることも問題があると思っている。なぜかという、こういう育ち方で育ってきた子供たち、ただ享樂的な遊びに楽しみを求めただけになりやすいのではないかと考えている。わがままで、一方的に自分の欲望を満ちたいだけである。

その結果、いじめることもただのゲームに認識してしまう。相手の痛苦は全然考えもしないのだろう。このように、私は家庭構造の変化もいじめと関係があるのではないかと思っている。

3. なぜ、いじめは解決できないのか

● 正当化されていくいじめ

日本のいじめ問題はずっと昔からあった。以上の書いたように発生する原因は実はなんとなくわかっているが、なぜ今に至ってまだ解決できないのだろう。むしろ、深刻化になっていくようだ。私の考えによると、その一番の原因は日本のいじめは「正当化されていく」ことにある。

私にとっては正当、または正しいいじめは絶対にありえない。どのような原因があろうとも、いじめる側が悪いと考える。しかし、最近、日本には「いじめられる側にも大いにある問題がある」という考えを持っている人がしばしばいるようだ。ある民間の組織に主催されたいじめについてのアンケート（図④）¹¹で、こういう質問があった。「いじめられている側も悪い」という考えに対して、あなたはどう思いますか？。結果は「強くそう思う」と「そう思う」と答え人を合わせると43%と「そうは思わない」の28%を大きく上回った。

設問

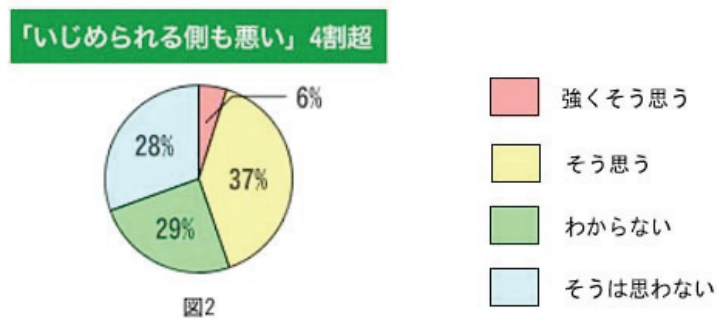
いじめは「いじめられている側も悪い」という考えに対して、あなたはどう思いますか？（図④）

回答

「強くそう思う」と「そう思う」を合わせると43%と「そうは思わない」の28%を大きく上回った。これは、上記の設問と相反するように思えるが、4割を超す人が、根強く「いじめ」を正統化する意識があることを示している。これについても、男女間、世代間の差があまりなかった。

¹¹ 『いじめ』に関するおとなの『声』アンケート／<http://www.hiroshima-soka.jp/keisyuu/ijime.html>

図④



この回答に対して、正直驚いた。いじめる側が、いじめられる側に、何らかの理由を感じたとしても、「いじめ」はしてはならない。もしいじめを受ける人にも問題があるという考えがあったら、それはいじめる側の口実になってしまうかもしれないのではないだろうか。

「いじめられる側は自身が問題があるから、いじめされてしまうのも仕方がないでしょう」ということになってしまう可能性があるのだろう。結局、いじめ側は自分の悪さがわからなくなってしまう。それはいじめを正当化ということなのであろう。もし子供たちは「いじめをするのはどんな理由があっても悪い」というのがわからなかったら、いじめ問題の解決をより困難にするのではないだろうか。

もう一つの調査もいじめが正当化されていくのを表している。京都市教育研究所の調査によると、小学生、中学生ともに半数近くが、「理由によっては弱いものいじめは悪くない」と答えている。「理由によっては弱いものいじめは悪くない」この考えは根本的な誤りではないだろうか。確かに様々な事例によると、いじめられっ子の性格普通はかなり内気、おとなしい、反応が鈍い、生意気などユニークな子ばかりだが、これらはいじめの理由にならない。つまり、「いじている側が100%悪い」という価値観が普遍化しない限り、いじめはなかなか解決できないと考える。

そして、いじめの理由についてのアンケート（図⑤）¹²の結果によるといじめっ子はやはり「相手に悪いところがあるから」いじめするという答えが一番多いのだ。しかし、面白いのはただいじめを見るのみの観衆によって「相手に悪いところがあるから」という答えはただ36.6%しかないのだ。それは何を表しているのだろうか。なぜいじめっ子の答えと比べたらここまで大副に減少するのだろうか。

¹² いじめ：教室の病い／森田洋司，清永賢二著、東京 金子書房 1994. 7、P. 63

図⑤—いじめの理由

	相手 に悪いと ころが あるか	ら おもしろ いか	から じめたく なる なんと なくい	そ の 他	計 (%)
いじめっ子	65.5	10.2	20.4	3.8	100.0
観衆	36.6	38.2	17.6	7.6	100.0

それはやはりいじめっ子は自分のしていることは、「正当化されるいじめだ」という意識を持っているからではないのだろうか。「相手が悪いから、私はいじめます。」そんな考えがあるからこそ、別に相手が悪いところがあるかどうかも構わず、自分の行為を正当化するようにする。もしこんな考えを持つ子供たちが増えたら、いじめが絶対解決できないのではないだろう。しかし、先に見た資料によると、このような考えを待つ人は実際は少なくない。いじめが正当化されていくのは今の日本社会の趨勢なのだろう。

「いじめられる側にも大いに問題がある」といういじめを正当化される考えをまず変わらないといじめ問題の解決は非常に難しいと思う。

しかし、ここまで書くと、一つの質問が湧いてくる。それはなぜいじめられる側は反抗しないのだろうか、ということだ。確かに「抵抗しなさい」というのは、いうだけなら簡単だが、実際にいじめを受ける子にとって、抵抗することは非常に難しい。なぜかという、前に書いたように、いじめはいつも親と教師が見えないところで生じる。だから、いつもいじめられっ子のそばにいるのは親でもなく、教師でもなく、いじめっ子なのだ。だから、相談しに行くと、もっといじめられるリスクを負わなければならないのだ。しかも、相談を受けても、ただの励まして、「自分で克服して成長していきなさい」程度のことを言われるだけだ。結局、リスクも負わなければならないし、役に立つ助けももらえないのだ。それに、いじめられっ子はいじめられたという被害意識をだんだん自分の中に膨らんでいく。しかも、相談もできないし、どこでも解消できない。その結果、登校拒否や自殺などな逃げるような行動になってしまう。

自殺に走った被害者がもちろんかわいそうだが、加害者のほうも深く傷つくと考える。なぜかという、加害者の方は前に書いたように、自分の行動をすでに自分の中で、正当化している。つまり、自分がやってことはあまり罪悪感を感じていない。だから、自殺の被害者が出たら、初めて自分の行動はどのくらいひどかったのかが分かるのである。それはかなりのショックを受けるだろう。従って、被害者はなぜ抵抗しないのかを問う前に、まず加害者にいじめはどのくらい人を傷めるのかを教えたほうがいいのではないだろうか。

● 軽すぎる罰

いろいろないじめに関するニュースによると、いくら被害者が自殺してしまっても、加害者に対する罰はそれほど厳しくないようだ。例えば、2007年6月の福岡いじめ自殺事件によれば、加害者の三人の同級生が不処分こととした。そのニュースを読んだとき、正直にビックリした。罰はちょっと軽すぎるのではないかと思える。しかし、日本の判例では従来は更正を前提としている少年法を根拠に未成年者の犯罪者にはたとえ凶悪犯であろうとも厳罰には処さないのが通例であったそう¹³。確かに、未成年の青少年に対して、更正するチャンスが大切であることには間違えない。だが、社会環境の変化によると、今の子供は昔のように単純ではないと思っている。精神としては大人に近いかもしれない。ずるい面もある今の子供たちに自分を反した行為に適切な罰が必要だと思っている。いじめめることも同じだ。適切な罰を通して他の人の体と精神を傷つく行為は犯罪と同じなものと認識してほしい。そして、一つの判例に出たら、ほかのいじめっ子にも警戒することができるのではなかろうか。子供たちは自分の非行についてちゃんと認識したら、いじめもだんだん減っていくのではないかと考えている。

4. 香港におけるいじめとの比較

日本のいじめ問題はだんだん深刻に行く一方、ほかのアジア国と比べたらどうなるのだろうか。私の出身地、香港と比べるとどうだろうか。香港では、いじめというのは、日本みたいにほぼ毎日ニュース、新聞に繰り返すことは全然ない。いじめで自殺してしまう子供もあまり聞いたことがない。学校内のいじめは当然あると思うが、大きな騒ぎになる程度ではない。正直にいうと、「いじめ」という言葉、香港にはめったに聞いたことないので、広東語でどうやって翻訳するのもちょっと迷った。しかし、よく考えてみれば、香港の社会現状は実は日本とそんなに異なるとも思えない。

例えば、香港の受験地獄もとても有名であり、イギリスから残ったエリート制度も今まだ健在している。ストレスといえば、日本の子供たちとそんなに違わない。そして、学歴も絶対的な存在である。家庭構造から見ると、核家族もだんだん増えていく。では、ここに問題が出てきた。社会状況、家庭構造もなかなか似ている日本と香港はなぜいじめ問題の深刻さはそんなに違うのだろうか。

私の考えではあるがによると、それはやはり考え方に関わるのではないだろうか。香港は1997年まで、長く前にずっとイギリスによって支配されてきた。そのため、考え方も西洋西方に似ていると思っている。個人主義的なのである。個人主義の定義は、辞書によると「国家・社会の権威に対して個人の意義と価値を重視し、その権利と自由を尊重することを主張する立場や理論がある」¹⁴。西洋的な西方の個人主義的な社

¹³ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

¹⁴ 大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉) / 監修: 松村明

会の下したで育ってきた香港人は割りと強気のではないかと考えている。そして、日本のいじめ事件から見たら、いじめられっ子はいじめられたらすぐ自分がどこか悪いのでいじめされてしまうという消極的な考えをつい持っているそうだ。反抗もあまりしない。逆に、香港の人なら、いじめされたら、たぶん自分が他の人より優れていて、嫉妬されてしまうので、いじめられると考えるのではないだろうかでしょう。そのためだから、日本に来てからたら、毎回いじめのニュース見ると、なぜ子供が抵抗反抗しないのがすごく不思議であった。そして、時々遺書にいじめっ子にごめんと書いてあることもあった。不思議で仕方がない。私は、どのように考えても、いじめる側が悪いと思っている。日本は加害者の方に甘いのではないかと考える。香港なら、どうなるのだろうか。しかし、いじめに関する判例が見つからないので、なんとも言えない。ただ、強気な香港人なら、軽すぎる罰が出たら、絶対誰か抗議しに行くであろう。自分の意見をちゃんと表すのも香港の人の性格の一つである。

このように考え方と性格の違いもう上に、いじめが発生する確率にも影響するといえようがあると思える。ストレスはあるが、きちんとそれを家族や友人などに話せるため、別に溜まりすぎることもない。いじめられても、別に自分のせいにならない。抵抗などをしたり、精神的に相手に勝つこともできる。それは香港人の特徴だと思う。したがって、社会状況と家庭構造が日本と似ても、考え方が違うため、いじめ問題もさほどひどくないのではないだろうか。

結論

いじめという問題は、決して簡単に解決するものではない。親、教師、子供たち自身、協力し合わないといじめは延々続いているのではないだろう。しかし、現実的にみれば、「助ける」あるいは「協力する」というのは簡単だか、実際に非常に大変なことであろう。だから、少しずつ進めばいい。まず、一番重要なのは、やはりいじめに対する考え方を変えないといけないのではないだろうか。いじめる方もいじめられる方も悪いという考え方はまずありえないと思える。やはりどう言ってもいじめる方が完全に悪いと考える。こういう考えはきちんと子供に伝えれば、いじめは少なくなるのではなかろうか。もちろん、大人たちもこういう考え方を持っていなければならない。陰湿ないじめが増えていく現状に対して、いじめる方の言い訳をきちんと認識した上で、日ごろの観察と当事者以外の言動も考慮しつつ適切に判断するのが必要である。適切な判断で、そして加害者に適切な罰を与え、少なくとも他のいじめっ子に注意できることが可能になるのではなかろうか。「こういうことをしたら、こんな罰を受けるよ」というメッセージをちゃんと子供に伝えるのもとても大事だと思う。こういう方向に少しずつ力を入れて進めば、いじめもだんだん少なくなるのではないだろう。

参考文献

1. 大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉) / 監修：松村明
2. いじめ：教室の病い / 森田洋司, 清永賢二著、東京 金子書房 1994. 7
3. 『義務教育に関する意識調査』結果の速報 (概要) 文部科学省 (2005年6月)
4. いじめ：見えない子供の世界 / 箭内仁 (ほか) 共著 東京 慶應通信 1986. 3
5. 学校ストレスの深層：いじめ問題の背景を探る / 井上敏明著 京都 世界思想社 1986. 5
6. 登校拒否のサインと心の居場所 / 坂本昇一著 東京 小学館 1993. 9
7. 文部科学省 生徒指導上の諸問題に関する調査研究会報告書 (平成17年6月)
8. いじめ自殺 / <http://yabusaka.moo.jp/ijime-jisatu.htm>
9. 『いじめ』に関するおとなの『声』アンケート / <http://www.hiroshima-soka.jp/keisyou/ijime.html> (2007年1月閲覧)